

研究ノート

平成 30 年度インターンシップ実習参加学生の意識調査

On the survey of students of internship in business

太田あや子、茗荷尚史、荒川崇、植松大介、辻将也、
田本育代、浅香清美、島田里緒菜

Ayako Ota, Hisashi Myoga, Takashi Arakawa, Daisuke Uematsu, Masaya Tsuji,
Ikuyo Tamoto, Kiyomi Asaka, Riona Shimada

Abstract

平成 30 年のインターンシップ実習履修生を対象に実習事業の評価および自己評価アンケート調査を実施した。その結果、多くの学生が実習前の準備や実習に熱心に取り組み、自己評価を向上させた。実習や授業への満足度も高く、実習でかかわった仕事への就職を希望する学生が多く、例年みられる理想と現実とのギャップによる就業意欲の低下である「リアリティ・ショック」の傾向はみられなかった。

キーワード：授業実践、インターンシップ、授業評価、自己評価

The purpose of this paper is to clarify our students needs to internship course . Students. responded to questionnaire which has 69 items.

The following results were obtained.

- 1 Many students wanted to get information of their internship before their practicum.
- 2 Many students are satisfied with their internship and they recommended this course for their juniors.

Key words : internship, course evaluation, self evaluation

I はじめに

「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」と 1997 年（平成 9 年）に当時の文部省が定義した大学生のインターンシップは、2018 年（平成 30 年度）には大学 689 校（88.3%：757,781 人、短期大学 270 校（80.1%：112,688 人（参加率 90.9%））が実施するに至っている（平成 30 年度インターンシップ実施状況調査）。この状況は、約 10 年前の平成 21 年度の実施校は大学の 504 校（67.7%）、短期大学の 170 校（43.6%）から大幅に増加している（文部科学省、2019）。

当時経団連は 5 日間以上のものだけを「インターンシップ」とするルールを設けていたが、2017 年（平成 29 年）に廃止され、今日では就職活動のための 1 日だけの「ワンデーインターンシップ」も盛んに行われている。また、現在のインターンシップは、学生の就職後の「こんなはずではなかった」というギャップ『リアリティ・ショック』を少なくし、離職を防ぐことに有効な手立てとして機能することが大

学や企業の関係者に広く認識されている（パーソル総合研究所、2018。花田光世ら、2011）。

本学では「インターンシップ」は健康・体育専攻（現「健康スポーツ専攻」）において創立時から平成 10 年度まで「社会体育実習」として 2 年次前期の夏季休業中に単位認定される必修授業として開設されていた。以後平成 11 年度からは選択科目となり、平成 14 年度生からは「インターンシップ」と科目名を変更して、同年度に文科省関連の助成金を得て早期化する就職活動解禁時期にあわせて 1 年次春期休業期間に現場就労体験実習を行ってきた。16 年度からは健康栄養専攻の学生の履修も可能となり、17 年度には健康スポーツ専攻 83 名（男子名、女子名）、健康栄養専攻 8 名（女子 8 名）が「インターンシップ」を履修している。また、健康マネジメント専攻設置後は全学共通の選択科目として位置付けられ、実習先も飲食業やホテル業など学生が希望する幅広い分野での実習を対象にして実施している。

平成 30 年度に当該授業は埼玉県の大学生の就労

支援事業である『平成30年度 大学生のための県内企業魅力発見事業（課題解決型授業）』（通称「社会人インタビュー」）に採用され、10時限に及ぶ外部指導者による事前授業を取り入れて（表1）33名が履修し、そのうち28名が2週間程度の学外実習を行った。

表1 埼玉県社会人インタビュー授業内容

コマ	内容
1	業界・企業研究方法を学ぶ
2	業界・企業・職種研究発表
3	対象企業の決定 ビジネスマナーの理解と実践（アポ練習）
4	訪問企業調査・インタビューテーマ協議
5	インタビューテーマ プレゼンテーション準備
6	インタビューテーマ 発表会
7	効果的な質問を考える・今後の活動
8	社会人インタビュー報告会①
9	社会人インタビュー報告会②
10	訪問の振り返り・レポート作成

II インターンシップの授業概要

インターンシップの授業概要は以下の通りである。三専攻1年生が対象で、2単位、事前14回、事後1回の学内授業と、学外での現場実習が2月～3月（一部野外活動等は12月から1月）に原則1日8時間、10日から2週間の日程で行われた。実習先選定に当たっては、学生自身が協力企業や組織、スポーツクラブの中から選ぶか、本人の出身地の学生が探してきた自己開拓実習先から選ぶことができるようにした。第3希望までを各自で決定し、担当教員が実習希望先と連絡をとって最終的に実習先が決定された。

冬季休業中や実習先決定後、学生は実習先を訪問し面接と同時に面接担当者に事前事業で検討した社会人へのインタビューを実施して1月にプレゼンテーションを行った。実習中は毎日その日の実習内容や反省点を記入した実習日誌を現場の指導者に提出した。また、事後の授業時に実習ノートの最終ページのレポートを作成し、実習先へのお礼状のコピー

を添付して見まわり担当教員へ提出した。

30年度の実習先所在地は、北は福島県から南は沖縄県までの広い範囲にわたっている。

学内授業や連絡、実習参観等の学生指導は専任教員5名（健康栄養専攻：教授、助手各1名、健康スポーツ専攻：専任講師、助手各1名、健康マネジメント専攻：教授1名）が担当した。その他、実習先の特性に合わせてサッカー、アスレティックトレーナー、ホテル関連の授業担当教員の協力を得た。指導教員等は実習先との連絡、学生の事前指導や情報提供、実習中の訪問指導、事後の実習日誌の評価等を担当した。

III 調査方法

インターンシップに関する質問紙調査(21項目69問)を、2019年(平成31年)4月の2年次前期オリエンテーション終了後のまとめの授業で実施した。回答数は23名(回答率82.1%、男子3名、女子20名)であった。

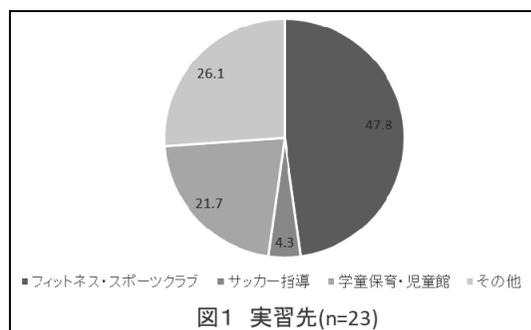
収集したデータを単純集計し、必要に応じて繰り返しのあるt検定を実施して有意差を検討して分析した。

IV 結果

1. インターンシップの実状

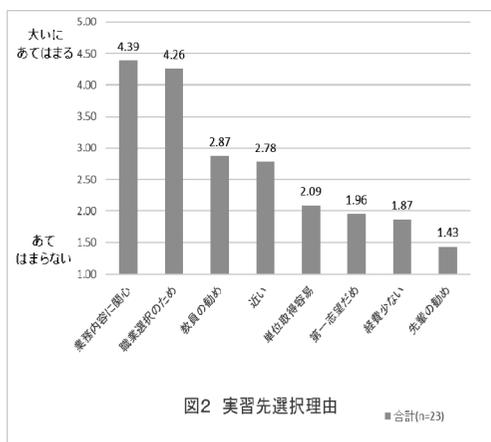
1) 受け入れ実習先

平成30年度の実習先は図1のとおりである。最も多い実習先は民間のフィットネス・スポーツクラブで(47.8%、9人)、次いでその他(26.1%、6人)学童保育・児童館(21.7%、5人)、サッカー指導(4.3%、1人)であった。その他は幼児体育派遣業、ホテル業、飲食業など多岐にわたっている。



2) 実習先選択理由

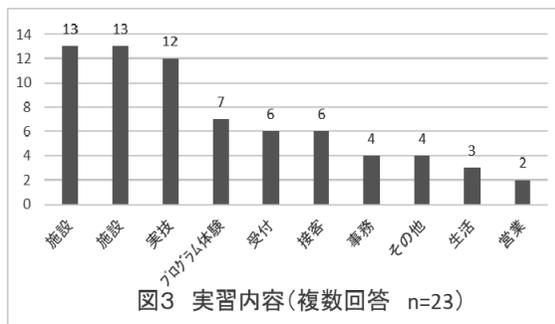
実習先選択理由として用意した設問に「大いにあてはまる」と答えた者を5点、「あてはまらない」を1点として計算した点数を高い順に図2に示した。「内容に興味関心があった」が4.39点と最も高く、次いで「就職や職業選択のため」(4.26点)が3点(どちらともいえない)よりも高くなっている。「教員の勧め」をはじめとする「人の勧め」や「経費負担の少なさ」などは重視されていない様子が見られる。学生はインターンシップの意味を理解し自身で将来に向けた職業選択を意識したうえで履修しているといえよう。



3) 実習内容

実習内容を図3に示した。実習先により業務は多様であるが、もっとも多い実習内容が清掃や備品の整理等の「施設設備管理」(13人)、次いでアシスタントも含めた「実技指導」は12人であった。以下実習先での様々なプログラムに参加する「プログラム体験」(7人)、施設のフロントでの「受付」と飲食業やホテルでの「接客」の業務が6人、書類整理やコンピューターへのデータ入力・整理などの「事務的作業」(4人)で、子どもの躾などの「生活指導」は3人、ちらし配りなどの「営業活動」は2人であった。

平成30年度も実習内容は実習の職種が広がったものの従来と大きく変わってはいない。



2. 事前授業に関する項目

平成30年度は学外講師が運営する授業が10回行われた。その他に担当教員が中心となって、提出する関係書類の作成を中心とした内容で11月に2回、コミュニケーション研修と題して社会人としての実習先での行動のノウハウと会話術を、接客マナー専門の外部講師を招き月に1回事前授業を実施した。また、同じく1月に例年同様、履修者全員を対象に、比企広域消防本部の協力を得て「普通救命講習会」を実施し、人工心肺蘇生法ならびに最新のAED(自動対外式除細動器)に関する実習も行い、「普通救命救急講習会終了証」の資格取得の機会を設けた。

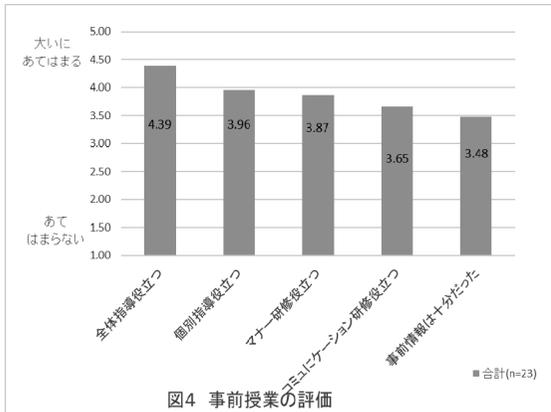
本年は埼玉県「社会人インタビュー」の助成事業の関係で、事前授業時数も例年よりも10回多く、資料検索やグループディスカッション、プレゼンテーションなどの課題も多かったが、学外実習に参加できた学生はしっかりと取り組んでいた。

1) 学生による学内事前授業の評価

事前の学内授業が実習に役立ったかどうかに関する学生の評価をまとめたものが図4である。5点満点の平均点で示した。最も評価が高かったのは埼玉県から派遣された学外講師や担当教員による履修者全体で受講した全体指導で4.39点、次いで教員の個別指導が3.96点、マナー研修が3.87点であった。その他の項目についても3点以上を示した。

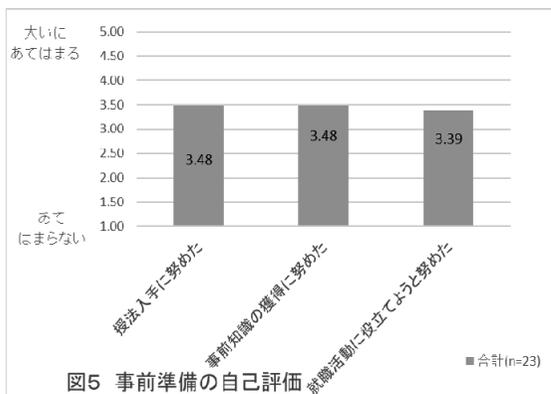
この結果から、授業時数や課題が多くとも平成30年度の埼玉県の事業の効果と考えられ、今後も今回と同様な方策を実施していくことを支持する結果となった。各自が企業研究レポートを作成したり、企業人へのインタビューの内容を考えてまとめたりするのみならず、それを3人ほどの少人数グループで

発表しあつて情報を共有することが今回の助成事業の目的であった。今回はその効果が学生の評価点に表れていると考えられる。



2) 学生の事前準備状況

学生自身が行った事前準備についてまとめたものが図5である。具体的に実習に必要な技能や知識を学ぶ努力し、自ら実習に関する情報を手に入れようとし、就職活動に活かそうと考えていたことが点数から理解でき、事前授業の課題作成等を活かしていることがうかがえる。



3. 実際の実習に関する項目

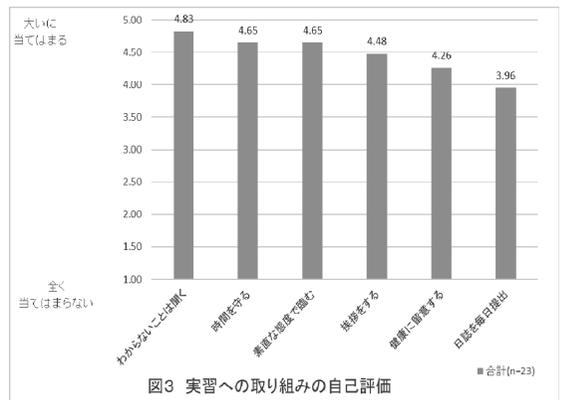
1) 実習中に努力したこと

実際の実習中に学生が努力した事項について5点満点で点数の高い順にまとめたものが図6である

最も多くの者が努力したことは「わからないことは聞く」(4.38点)で、次いで「時間を守る」(4.65

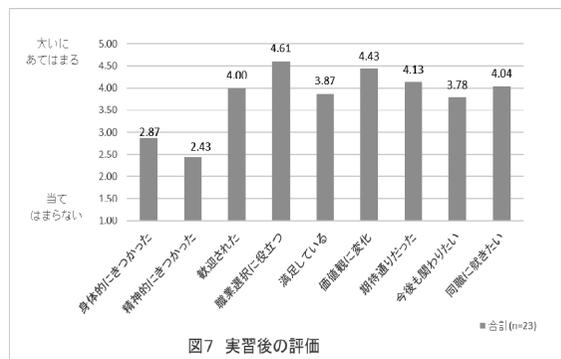
点)、「素直な態度で実習に臨む」(4.65点)となり、例年最も多かった「挨拶をする」(4.48点)は4位となり従来とは異なる様子がみられた。

「挨拶をする」ことは学生にとっては特別なことではなく、むしろ社会人として求められる事項に努力したことがわかる。これは事前授業とも関係があり、外部講師が強調していた授業内容が学生に浸透した結果と考えられる。



2) 学生による実習の評価

平成30年度学生の実習に対する5点満点の評価を図7にまとめた。



4.61点の「職業選択に役立った」が最も高く、学生が「価値観が変わる影響を受け(4.43点)」「期待通り(4.13点)」の実習を通して「同じ職業に就きたい(4.04点)」としている。「精神的にも肉体的にもきつい」は「あてはまらない」としてとおり、例年よりも多い。この傾向は従来とは異なって大きく

異なった傾向を示している。従来は履修者の半数が「同じ職業に就きたいと思わなくなる」という「価値観の変化」を報告していたが、今年度の実習生はインターンシップ実習でもみられる「こんなはずではなかった」というギャップ『リアリティ・ショック』が少なかったことが理解できる。

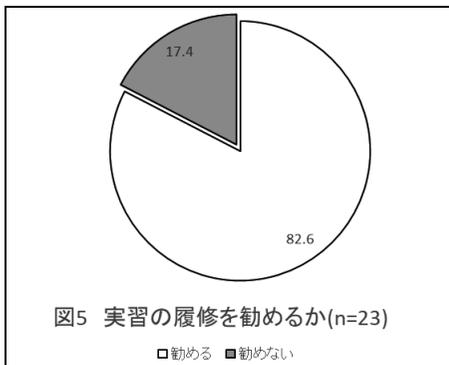
今年度の実習は従来よりも事前授業が多く、そのことが実習の準備、業界や職業の理解、社会人としての立ち居振る舞いなどを学習する機会が多かったため、実習先でも歓迎され、充実した実習を行えた、それがこの結果につながっていると考えられる。仕事の現実に触れ、自分の職業適性が理解でき、学生の職業観にこの実習がプラスの影響を与えていることが推察される。実習で得た経験を前向きに活かしていくためにも今後も事前授業に力を入れるとともに、このような結果を得た実習の成果を活かせるよう就職に関する部局と連携してことが重要であろう。

4. 後輩へのアドバイス

本年度は 82.6%の学生がインターンシップの履修を後輩に勧めるとした(図8)。

勧めないとした者 4名(17.4%)のうち1名が清掃中心の実習内容をあげ、その他の者はコメントしていない。

勧めない理由では、例年と同様に指導者や実習施設の人間関係のよさ、実習内容や実習指導の充実、会員さんや子ども達とのふれあいなど人とのコミュニケーション、自分をみつめる機会、学校ではできない体験であることなどがあげられている。

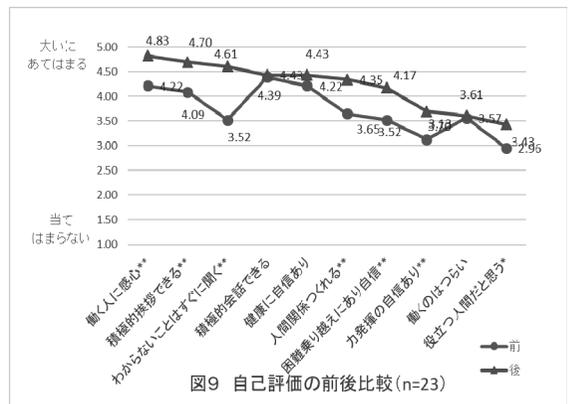


5. 実習後の自己評価の変化

履修者の自己や他者への評価の前後比較を事後の点数が高い順に図9に示した。

実習後最も高い点数を示したのは「働く大人に感心する」の項目で(4.38点)で実習前が4.22点であった評価が0.61点上昇し1%水準で有意な差がみられた($t=-3.275, p<.01$)。その他「積極的に挨拶できる」、「わからないことはすぐに聞ける」、「人間関係づくりに自信がある」、「自分の力を発揮することができる」、「自分は役に立つ人間である」の項目で有意な点数の上昇がみられた。その一方で「働くのはつらいこと」は大きく上昇せず、仕事に対する意識がマイナスの方向に向かっている様子うかがえなかった。

全体的に仕事の現実を知ったことにより、仕事に対する意識に変化がみられ、自己評価は高くなる傾向がみられた。



V 考察

調査結果から平成 30 年度インターンシップを検討し、今後のインターンシップ実習授業指導への課題をまとめると以下ようになる。

平成 30 年度の実習は、埼玉県「社会人インタビュー」の授業を取り入れた成果がみられたと思われる。十分な時間をかけて下調べをして授業仲間と情報交換をしたり、インタビューでの質問項目を考えながら仕事に関する意識を醸成したりすることができたと思われる。また、他人の意見を聞いて自分自身の意見を発表したり、自分がプレゼンテーションを行ったりすることにより自己表現の力を伸ばし、実際の実習で手ごたえを得た結果が事前事後の自己

評価の変化に現れたものと考えられる。それは事前事業の評価や、実習にも前向きに取り組んだという事後の調査結果に表れている。

今回の県の指導プログラムは効果検証済みの確立されたものであったため、指導する教員にとっても、新たな知見を得ることができた。特に学生同士の意見交換や、相談してインタビューの質問を考えるなど「アクティブラーニング」の要素が多く、その授業の指導方法や教材、プレゼンテーション用スライドの使用方法など新しい授業方法として有益なものであったと考えている。

本調査から、事前事業の有効的な運営が学生の実習を充実させることが明らかとなった。

VI まとめ

平成 30 年度のインターンシップは学生の進路選択にプラスの方向に働いた。今後は授業指導を担当する教授陣が今年度に得たインターンシップ事前指導のノウハウを活かし、さらなる授業改善に取り組み、多くの学生が自分の進路を考える効果的な実習が行えるよう支援していく必要が理解された。

【参考資料】

- 1) 文部省「インターンシップ等学生の就業体験のあり方に関する研究会報告」1998年。
- 2) 文部科学省「大学等における平成19年度インターンシップ実施状況調査」2005年。
- 3) 文部科学省「インターンシップ導入のための手引き—インターンシップ・リファレンス—」2009年
- 4) 太田あや子、森 喬夫、河合一武、杉山仁志、桂和仁、星川秀利、浜田琴美、大橋慶子、浦田憲二、文谷知明「インターンシップ学外実習に関する調査—第3報—」武蔵丘短期大学紀要 Vol.12、2002年、33~41頁。
- 5) 花田光世、宮地夕紀子、森谷一経、小山健太、KEIO SFC JOURNAL, Vol.11 No.2、2011年、73-85頁。
- 6) 学校法人浦山学園富山ビジネス専門学校「自発的インターンシップ・プログラムテキスト(ホテル編) 教員副読本」2016。
- 7) パーソル総合研究所「企業インターンシップの効

果検証調査」2018年。

- 8) 文部科学省「平成29年度大学等におけるインターンシップ実施状況について」2019年。